

カンピオーネ～閃光の 王

悠埜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたらカンピオーネの主人公草薙護堂になっていた、木が付いたら原作が始まって…

「じファンからの転生物です

目次

1	閃	魔王になった日	1
2	閃	魔王になった日Ⅱ	6
3	閃	魔王になった日Ⅲ	11

1 閃 魔王になった日

こんにちは、俺の名前は草薙護堂。名前で分かる人もいると思うけど

そう、あの有名なライトノベル「カンピオーネ」の主人公だ。

よくあるテンプレみたいな展開でただ神様からチート能力は貰ってないんだけどね。

最初っからラスボスすか出てこないこの作品の中でチートなしは正直本当にきつい。

そういえば俺の殺した神様は原作どおり、というわけにも行かず最終的にはもつと別の神様を殺す事になった。ではまずその話でもしよっか。

「ただいま」

「お帰りお兄ちゃん。今日はいつもより早かったね。」

「今日は師匠になんか用事があるっていうことで早めに切り上げられたんだ」

「へえ、良かったね」

師匠っていうのは俺が通っている道場の先生で流石にこの世界で何も持たずに原作に関わるのは危ないと思い、爺ちゃんの伝を使い通わせて貰っている。

なんでも、裏のほうでは中々に名前を馳せていたそうさ。といつてもとある事件がきっかけで今は現役を引退。そしてたまに知り合いの伝で教わりに来るこの世話をし

ているというわけだ。

「お帰り、護堂」

「ただいま、爺ちゃん。」

原作を読んでいる人はもう知っていると思うけどあの物凄い女誑し、そう草薙一郎だ。

原作読んでいる時はこんな人ありえるのかよと思っていたけど実際に会ってみるとほんとうにその凄さが分かる。うちの師匠の現役引退の事件にも関わっていたらしい。

おっと話がそれたな。

「護堂君、君からも言っただけてくださいよ」

この人は高松さん、爺ちゃんの昔からの知り合いで爺ちゃんの知り合いの中ではとても良識のある人間だ。

「いたい如何したんですか？高松さん」

「なに、私の昔の知り合いの荷物が見つかったの。それを届けに行こうと思っただけめられているわけだよ。」

「千代さんと約束したじゃないですか、もうあの人とは会わないって。」

成る程。とうとう原作の始まり始まりって訳だな。

「じゃあ俺が行くよ。丁度暫く稽古も無いみたいだし、爺ちゃんもいけないんだろう」

「ほう、頼めるか。イタリアのサルデーニヤという所に住んでいるんだ。」

「分かった、一応イタリア語も喋れるし問題は無いよ。」

「そうかいじゃあ頼んだ。」

暑い、流石イタリアななが流石なのか自分でもよくわかんないけど。

いまの護堂の格好は白いTシャツに紺の半ズボンという涼しげないでたちだ。

「さてと、まずはホテルにチェックインした後には観光と行きますか」

やっぱり良い所を選んでおいてよかった。窓から見える景色は中々に絶景である。

さてと昼食を取った後は町の散策としやれ込もうか。

ホテルの外に出ると昼時にしては人の行き来が少ない。

これがシエスタっていうやつか。ちなみにシエスタっていうのは昼寝の事だ。

首都ではないが田舎などではまだ残っているらしい。

「きゃー、誰かそいつを捕まえて！」

うん、悲鳴が聞こえたほうを見るとどうやら引ったくりらしい。

丁度こちらに向かつて来たのでこぶしを構え迎撃の準備をする。

「うおー刺されたくないなら退け。」

ナイフを持っているようだメンドクサイなと思いつつも心を落ち着ける。

ハアアアアアアア

ゆつくりと己が気を高める

「退け〜」

よし間合いに入った、

「セイツ」拳を鳩尾に打ち込むと

「ガハツ」引ったくり犯を見事に気絶させると女の人がこちらに走ってきた。

「ありがとう。結構あれ大事なもののな。」

「いいえ、俺は自分ができる上での最高の行為をただけですよ。」

かなりの美人だ。金髪のロングで、かなりの高身長、そして出るべきところは出ており引つ込むべきところは引つ込んでいる。街中で歩けば10人中8人は振り返るほどの容姿だ。

「お昼まだ？もしまだならお礼もかねて私に奢らせてほしいな、良いお店を知っているんだ。」

「まだです、それにしても今日はラッキーです。こんな不慣れな町なのにまさかこんな美人さんに出会えて一緒にご飯できるなんて。」

「そんな／＼／美人なんて／＼／お世辞なんて別にいいよ。」

「お世辞なんかじゃないですよ俺は、思った事をそのまま口にただけです。」

「そう、ありがとう。じゃあついて来て、結構此処から近いんだ」

「いただきます」

「自己紹介遅れたね、私はシオン・エルトライ」

「俺は草薙護堂です。」

「それにしても、本当にさつきはありがとう。そういえば君みたいなのがこんなところに一体どんな用事なの？」

「爺ちゃんの友達に届け物です。ルクレチア・ゾラっていう人なんですけど知っていますか？」

「御免、知らないわ」

一瞬シオンさんの目が細くなった気がしたけど気のせいかな??

「(ゴ)馳走様でした」

「また会える事を期待しているわ、小さな騎士様」

チュッ

頬に一瞬暖かいものを感じた、それに何かの香水なのだろうかとても良い香りがある。

ぼくが赤面している間にシオンさんはどこか行っちゃったみたいだ。

2 閃 魔王になった日Ⅱ

美人に出会えた事もあって少々浮かれながら町を歩いていると人とぶつかってしまった。

思っていた以上に気が緩んでいたようだアチャ〜と内心思いながら「すいません」と謝ると

「何、気にする出ない。そちも他意があつてやったわけではないだろう。」

と、やたらと古めかしい返事が返ってきたので驚きその少年を見ると

年は10代後半で黒髪に象牙色の肌の中性的な美少年で男である自分も嫉妬してしまふそう。

そして何よりもとても神秘的なものが体中から滲み出ている。

成る程ね、この人が原作で護堂が殺し権能を篡奪した古代ペルシアの軍神で、あらゆる障害を打ち破る者であり10の姿に変身して常に勝利する常勝不敗の神「軍神ウルスラグナ」か…。

そうとわかると、いきなり足が竦んじまった。情けない自分を叱咤激励する。

俺が震えているのを見たのかウルスラグナが話しかけてくる。

「如何した、わしは主が怖がるような事をした覚えは無いぞ。」

「いや、これでも俺ちよつとだけだが武術の端くれをかじっているんだけど何かあんだからは物凄い力を感じた、あんたが勝つイメージしか生まれただけど手合わせしてみたいっていう感情がな。」

そういえば自己紹介ままだったな、俺は草薙護堂。よろしく。」

「すまないな、どうも名前が思い出せないんだ。それにしても勝てそうに無いけど戦ってみたいとは戦士じやの。」

「記憶喪失つてやつか…、それと戦士じやないぞ。俺個人としては武士（もののふ）と呼んで貰いたいな。」

「ふむ、同じような意味だと思いがな…。」

「うんにや大分違うと思うぞ。」

「それに、俺は武術じや敵わないと言っただけで他の事で負けるつもりはないぞ。」

「ほう、わしと勝負しようというのか。」

「ああ、あそこに丁度テニスコートがあることだしテニスでいいか？というかルール知っているか？」

「なに、知らずとも大丈夫じや、わしは負ける事は生まれてから一度も無いからな。」

「ほう、言っただな。」

実は今の世界では生き残るために武術をやっているも昔は小・中・高・大学すべてテニス部に在籍していたしそこそこ良い所まで大会でもいつてしかなり自信がある。

「じゃあ、まずはこちらからいくぞ。ハッ」

武術で身体を着てているだけあってかなりいいサーブが打てた。流石に初見でこれは打ち返せなかったみたいだ。

「ほう、やるの。」

「どうも、次いくぞ。ハッ」

最初はかなり優勢だったのに慣れてきたのかどんどん追いつかれてきた

そしてタイプブレイクに突入した。1―2で後俺が1ポイント入ると勝ちの状況だ。

「すごいな、あんたかなり自信あったんだけどな。といつて最終的に勝つのは俺だ。」

「主やるの、だが、勝つのは我じゃ。」

いくぞ

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

物凄い大きな咆哮?が聞こえたが気にせずとは無理なものサーブを打ち込む。

トンッ トン トン

い。 どうやらウルスラグナは咆哮に気をとられすぎてこつちを全く見ていなかったらしい。

「あつ。」

俺たちの声が重なった

「我が負けたのか。」

「いいや、お前の負けじゃやない。今のはルール上お前が構えていなかったからなした。」

人々がパニックになりながら逃げているのを気にせず話し続ける俺たち。

「いいや、私の負けじゃ。戦いの途中に気を抜くなど言語道断。戦場なら死んでいたかもしれない」

「いいや、ルールがあるからこそ試合として成り立つそして今のはルール上ポイントにならない。」

だから今のは入っていない。わかったか。」

「主がそういうのならそうしようか、にしてもすまん、勝負の途中じゃが用事が出来てしまった。」

「続きは次回という事で良いか？」

「勿論、次こそは勝つ。」

「ああそれではさらばだ。」

そして咆哮のしたほうに走っていく、

「おいそつちは危険だぞ。」

正体がわかっていたとしても呼び止められずにはいられない

「なに、わしは大丈夫じゃ、そういう主こそ早く非難せよ。」

そういつてかなりのスピードで走っていった。

「我未だ嘗て敗北せず、そう言っておきながらまけるとはのふむこれが悔しいという感情か久ぶりに思い出した、だが次こそは負けん。」

3 閃 魔王になった日Ⅲ

「あれが、ウルスラグナの10の化身の1つ猪の咆哮か。すごい迫力だったな。ということはもうそろそろ決戦が近づいているという事か。本当に倒せるのかな【神】なんて存在に。」

不安を抱えながらも港町まで歩いていく。するとまたウルスラグナと会った。

「よう。用事って言うていたけど用事はもう済んだのか?」

「ああ…」

なんとも要領を得ない返事だなと思いつつも問いかける

「でつ、記憶は戻りそうなのか?」

「もうすぐだろうな、お主とテニスだったか?をしていると何かを思い出してきた。」

「変わった奴だな、テニスで記憶が戻りそうなんて。それだ」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「なんだ?なにが起こっている?」

「ふむ、猪か…」

そこには猪と天馬が戦っていた。

俺は駆け出した。

「主!! 一体何処へいく。」

「あそこには仲良くなった人とかいるんだ。あんなの納得いかないよ!! おかしいよ!!」

「主一人行ったところで何かが変わるわけじゃないぞ、それでも主は行くのか?」

「ああ、勿論だ。」

「ふむ、この暮らしもなかなか気に入っていたのだが…。友の頼みじゃ。我が行かんわけにもいかんな。」

「おい! どうしたんだよ。」

「なに、アレをとめに行くだけじゃ、ただしもう貴様と語ろうことは出来んだろうな。だがこれが本来の宿命なのじゃな。」

「俺のせいなのか?」

「気にするな。さつきも言ったじゃろ。宿命じゃ。」

「それではな草薙よ、なかなか楽しかったぞ。」

「おい! おい!」

そう言つてウルスラグナは走っていった。

俺のせいだ、俺の…。くそつ。近くの壁を殴る、殴る、殴る、殴る

まだあいつは神様じゃなかったんだ、なのに、なのに俺のせいだ

自分が恨めしい。くそ！「ゴツツ」くそ!!「ゴツツ」くそ!!!「ゴツツ」

拳から血が滴る

「ちよつとよろしいかしら」

いきなり背中から声をかけられたもで振り向く

「こんにちは、あなたにちよつとお話が聞きたいの、さつきあなたと話していた男の子のことよ。」

そこには一人の女性がいたとても綺麗な髪、モデルのようなプロポーションいるだけで空気が変わっている気がする。なるほどね大体誰か予想はついたそれでも名前を訊ねずにはいられない

「俺の名前は草薙護堂、あなたの名前は？」

「あら、自分から名前を名乗るなんて紳士としての最低限の嗜みはもっているみたいね。私の名前はエリカ・ブランデッリよ」

やはりか…

「それで用事は何だ？見てのとおり俺は今、結構気が立っている。」

「あら、さつきも言ったとうりさつきのあの少年について話が聞きたいの。」

「おれも、あいつについてはほとんど知らないぞ。」

「それでもいいわ、知っている事をすべて教えて欲しいのよ」

（説明中）

「成る程ね、やはり当たりかしら？」

「分かっていても聞かずにはいられない」

「なあ、一体お前はあいつについて何を知っているんだ。」

「あら、聞きたい？でもそうねまずは教えて欲しいならそれなりの態度があると思うのよ、そして私の名前はお前なんていう名前じゃないわ。自己紹介はしたはずよ、ちよんとした名前呼びなさい。」

「俺はあいつについて知っている情報をおm…エリカに伝えたはずだ、これで貸しは一つだ、返してもらおうか。」

「あら、せっかちなのね。せっかちな男はもてなくなつてよ、でも別にいいわ。話してあげる。」

でもそうねまずはディナーといきましょうお腹が減ったわ。」

そして俺の腕を持つ

「何するんだよ！」

「あら、女性をエスコートするのは男の義務よ、なによりこんな美少女と一緒に話せるんだから感謝してもらいたいわ。」

なんつー唯我独尊主義なんだよ、先が思いやられる。そう考えながらもエリカをエスコートする事になった。

はあ